様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２００５７

研究課題名（和文）大英博物館所蔵日本美術コレクションの基礎研究

研究課題名（英文）A Research of the Japanese Collection in the British Museum

研究代表者
彬子女王（Mikasa, Princess Akiko of）

立命館大学・衣笠総合研究機構・准教授

研究者番号：２０５７１８８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の一番大きな成果は、大英博物館の日本コレクションの草創期である19世紀後半から、コレクションが盤石なものと変容を遂げていく約100年間の日本関連の展覧会図録の調査を通して、大英博物館の学芸員たちの日本美術に対する理解の変遷の過程が明らかになったことである。
　19世紀後半のコレクターの主観が反映されたやや偏った日本美術理解が、日本から直接情報が入ってくるようになったことで徐々にその誤差が少なくなり、現代の漫画や伝統工芸の展示などを通して、大英博物館独自の日本理解を示すようになる過程を追うことができた。

研究成果の概要（英文）：After looking through the exhibition catalogues of Japanese art from the late 19th century to the late 20th century in the British Museum, it became clear how the curators' understanding of Japanese art changed through 100 years in the British Museum.
 It clearly illustrates that in the late 19th century, collector's understanding was reflected on collecting policy and exhibition of Japanese art, but it gradually changed throughout the 20th century.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：日英文化交流　コレクション史　大英博物館

１．研究開始当初の背景

申請者は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての大英博物館の日本美術コレクションを通して、西洋人の日本美術観がどのように変化したか、また日本と英国においてどのように「日本美術史」が形成され、理解されていったかの過程を、博士課程在籍中に研究してきた。西洋人によって蒐集された日本美術コレクションを歴史資料とみなし、コレクションの中身の形態、画派、画題別の内訳を分析して、コレクターの興味、傾向を導き出すとともに、時代ごとの社会的、学術的動向と照らし合わせて、西洋人の日本美術に対する意識の変遷を分析した。

申請者の博士論文は、大英博物館、ひいては英国人の日本美術に対する意識の変遷を、大英博物館が日本美術品の蒐集を始めた 1850 年代から 1930 年代までの歴史とコレクションの分析を通して明らかにしたものである。しかし、それ以降も日英間の日本美術を介した交流は続いており、コレクションは現在も拡大を続けている。特に、1930 年代以降の大英博物館の日本美術コレクションの全貌を明らかにすることは、日英交流史に新たな側面を提供すると思われる。本研究は 1930 年代以降、現在までの大英博物館の日本美術コレクション形成の歴史を通して、英国人の日本美術観が、日本美術に初めて出会った 1850 年代以降現在まで、どのように変化したかを明らかにするものである。

２．研究の目的

本研究は、大英博物館で日本美術品の蒐集が始まった 1850 年代以降現在までの通史を明確にすることで、日英美術交流史・英国における日本美術観の変遷を示すことを目標とする。申請者が博士論文で取り扱った大英博物館における日本美術蒐集と展示の研究成果を基盤に、博士論文で扱いきれなかった 1930 年代以降の蒐集の歴史に着目し、大英博物館所蔵の 3 万点に及ぶ日本美術コレクションの全貌を明らかにするものである。

３．研究の方法

第一に、大英博物館に１ヶ月単位で数度にわたり滞在し、各部局の登録簿や館内データベースを利用して、集中的に所蔵された日本美術品の来歴を明らかにする。それを基に、大英博物館が最初に日本美術品を入手した 1850 年代から現在に至るまでの作品の来歴リストを作成する。

第二に、寄進者や購入先の詳細の調査、コレクション内容の分析や時代ごとの傾向などを導き出し、大英博物館所蔵の日本美術コレクションの全貌、英国における日本美術観の変遷を明らかにする。

（1）大英博物館における長期資料調査
大英博物館の日本セクションをベースに、版画・素描部、民俗学部、英国中世古美術部を前身とした各部局で、登録簿・ミーティングの議事録・所蔵者と博物館間に交わされた書簡など、特に申請者が未調査の 1930 年代以降の資料を中心にアーカイヴの調査を行う。館内データベースの情報と照らし合わせ、順次訂正していく。

（2）所蔵品来歴リストの作成
（1）で得られた成果を基に、年代、作品番号（旧所蔵番号と現在の所蔵番号）作品名、旧所蔵者を明記したリストを作成する。登録簿には、「日本絵画 100 点」といった感じで、個々の詳細がわからないものもあるので、それらに関しては、データベースの情報、実際の作品との照合を行い、データを正確化していく。

（3）旧所蔵者の来歴リストの作成
来歴リストから、大量の作品を寄贈、もしくは売却している人物、美術史的価値が高い作品の旧蔵者などを取り上げ、経歴を調査する。さらに、その作品が大英博物館に入るに至った経緯、時代背景などを検証する。

４．研究成果

大きな成果は、19 世紀後半から 20 世紀後半にかけての、日本関連の展覧会図録やプレスリリース等の調査を行ったことで、100 年間の大英博物館内部での日本美術に対する理解の変遷を追えたことである。

日本美術蒐集家本人の主観で展示物が構成されていた 19 世紀後半は、日本美術の通史をコレクションの中から示す構成になっている。浮世絵の展示も、約 5 年をかけて、浮世絵の草創期から幕末までを時代を追って、毎年版画・素描部のギャラリーで展示し続けている。しかし、時代を経るに従って、「風景画」「美人画」「北斎」「根付」「円山四条派の絵画」など、内容に特化された展覧会が開催されるようになってくる。

また、浮世絵の展覧会の最終年度には、「タイムズ」紙の展覧会評に、「我々鑑賞者は、これまでの浮世絵の展示を通して浮世絵の歴史を十分理解している」と言った趣旨のことが書かれており、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけては、展覧会の記録からも、日本美術史、また浮世絵の通史を、大英博物館側が鑑賞者に提供しようとしていることがうかがえる。

専門的な展覧会が開催されるようになったのは、日本担当の学芸員であったローレンス・ビニヨンが、日本画家、修復や絵画の鑑定家と言った、日本美術の専門家たちを大英博物館に招聘したり、日本を旅するなどして、専門的な日本美術に関する知識を日本から直接吸収しようとし、日本絵画の蒐集方針を

変えて行った時期の後にあたる。つまり、ビニヨンの努力により、日本美術コレクションが充実していき、その充実したコレクションを利用して、1930年代以降より、日本美術に関する基礎的な知識を鑑賞者が既に持っているという前提で、より専門的な内容の日本美術関連の展覧会が徐々に開催されるようになっていくのである。大英博物館の日本部門における、日英の人的な交流や、蒐集方針の転換等については、これまで様々なアーカイヴや登録簿、データベースの情報等から明らかになっていたが、このたびの調査を通して、展示の側面に、大英博物館の内部における日本美術に対する理解が色濃く反映されていることが証明されたのは大変意義深い。

また、現在大英博物館が所蔵する中国絵画の名品である、顧愷之筆の《女史箴図》の宋時代の模写作品の木版複製の作成依頼が、1902 年の日英博覧会に合わせて渡英した版画家の漆原由次郎と摺師の杉崎秀明に成され、完成するまでの過程を、版画・素描部の議事録から詳らかにすることができた。日英の文化交流史の観点から見ても、とても重要な事例である。

さらに、19世紀後半にお雇い外国人として日本を訪れ、アマチュアの考古学者として日本全国の古墳を踏査したウィリアム・ガウランドが撮影した古墳の資料写真や調査ノートが納められた箱を全て調査し、整理を行った。資料自体の調査に関しては、考古学の研究者に委ねなければならないが、明治時代に日本を訪れた外国人たちが、どのような場所を旅し、交流を持っていたのかがわかる大変貴重な史料であった。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　6　件）

① Princess Akiko of Mikasa ‘Hōryū-ji Mural paintings in the West – The Role of Reproductions of Japanese Art for Non-Japanese Audience –‘ 慈照寺国際交流特別講演会、ギメ美術館（フランス）、2013年10月30日

②彬子女王「19世紀海外における陶磁器蒐集－煎茶と海外、そして現在－」全日本煎茶道連盟　第48回　夏季大学、京都染織会館　シルクホール、2013年8月25日

③Princess Akiko of Mikasa, Reproductions of Horyū-ji Treasures – Mural Paintings and Kudara Kannnon in the British Museum –,国際シンポジウム『ヨーロッパの博物館・美術館保管の日本仏教美術コレクションと日本観の形成』パラツ・ウォフフ（ポーランド）、2012年6月4日

④Princess Akiko of Mikasa, ‘What is the History of Japanese Art?: Displaying Japanese Antiquities at the British Museum’ 13th International Conference of European Association for Japanese Studies, University of Talinn, 2011年8月25日

⑤彬子女王「英国人医師に教えられた日本美術史－ウィリアム・アンダーソンと大英博物館の日本美術コレクション－」消化器内視鏡学会総会、国際会議場（名古屋市）、2011年8月18日

⑥彬子女王「大英博物館における『日本美術史』の形成-20 世紀初頭の変革を中心として－」第 64 回美術史学会全国大会、同志社女子大学新島記念講堂、2011年5月20日

〔図書〕（計　7　件）

①彬子女王「海外における日本像の発信－大英博物館を中心として－」福井憲彦 監修,伊藤真実子，村松弘一 編『世界の蒐集 ： アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』山川出版社、2014年、359頁（93－121頁）

②島尾新、彬子女王、亀田和子編『写しの力 ： 創造と継承のマトリクス』思文閣出版、2013年、266頁

③彬子女王「英国における日本美術コレクション－特に大英博物館を中心として－」下原三保編『近世やまと絵再考:日・英・米それぞれの視点から』ブリュッケ、2013 年、366頁（23－38頁）

④彬子女王編『文化財の現在　過去・未来』宮帯出版社、2013年、344頁

⑤彬子女王「19世紀英国における円山四条派理解について－英国人蒐集家が京都の画師に寄せた思い－」文部科学省グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）監修,冨田美香，木立雅朗，松本郁代，杉橋隆夫 編『京都イメージ = Urban Images of Kyoto ： 文化資源と京都文化』ナカニシヤ出版、2012年、248頁（44－57、164－175）

⑥彬子女王「大英博物館所蔵アンダーソン・コレクションの可能性」小林忠先生古稀記念会編『豊饒の日本美術－小林忠先生古稀記念論集』藝華書院、2012年、581頁（392-97）

⑦松本郁代・出光佐千子・彬子女王編『風俗絵画の文化学 II－虚実を写す機知』、思文閣

出版、2012 年、435 頁（411-435）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
彬子女王（Mikasa,Princess Akiko of）
立命館大学・衣笠総合研究機構・准教授
研究者番号：20571889

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：